

## 研修報告書No. 1 5

所 属：県外大学病院研修医

研修先：本山町立国民健康保険嶺北中央病院

大川村国民健康保険小松診療所

高知市土佐山へき地診療所

空港に迎えにきてくださった高知医療再生機構の方に「あの山に向かいますよ」と小さな山を指さされ車で約 50 分。私が研修させていただいた嶺北中央病院は隣には吉野川が流れ周りを見渡せば山々がひろがる自然豊かな場所にあった。病床数約 100 床、常勤医師数は 6 名(内科 5 名、外科 1 名)で地域の中核病院として 365 日 24 時間救急の受け入れを行っており、またへき地拠点病院としてへき地診療所への派遣も行っている。地域の高齢化率は約 45%であり患者は 80 歳以上がほとんどであった。研修内容は嶺北中央病院での研修だけでなくへき地診療所での診療、訪問診療、訪問リハビリテーション、放射線科や検査室での研修など様々な貴重な経験をさせていただいた。

特に診療所での研修は貴重な体験であった。汗見川診療所というへき地診療所で研修させていただいた時、数日前トンネル内で落盤事故が起きた際に現場まで救急車がかけてくれるのに 40 分以上そこから市内の病院に搬送するのに 2 時間以上がかかったという話を聞いた。ドクターヘリの設備もあるが暗くなってしまうとヘリは使えないという当たり前のこともその時初めて気づき地域医療の厳しさを改めて実感した。大きな病院まで距離があるだけではなく診療所の数・医師数も圧倒的に少なく、地図で見せていただいたその診療所のカバーする診療圏は高知市街から愛媛県との県境までひろがっていて驚いた。また、患者の送迎に同行させていただいたこともあった。車一台がぎりぎり通れる山道の更に急な階段の上に家が建っており、風呂場や台所は棟がわかれているという。農作業中に山から落ちたなどの事故で搬送されることも多く、へき地での生活の厳しい現状も知った。

そのような地域の医療を支えている要因としてひとつは栄養士、理学療法士、ソーシャルワーカーなど多職種間での協力が大きいと感じた。急性期を過ぎた高齢の患者が今後どこでどのように生活していくかに対して、一辺倒な解決法ではなく、その患者の自宅の状況や本人の希望を考慮し臨機応変に対応していた。自宅まで訪問し写真を撮り見取り図を作成したりして、その患者に必要な支援やリハビリを行っていた。また入院中に近所の方がお見舞いに来ることが多く、近所同士の助け合いも地域医療を支えていると感じた。

医師の仕事としては関東の大学病院とその分院しか知らなかった私にとっては内科が専門別でないことも初めての経験であった。私の班には脳梗塞も消化管出血も心不全の患者もいた。病院の設備としては CT、MRI はあるものの解像度は最新のものとはあきらかな差があり、また検査項目も限られている。そのような環境の中で様々な疾患に対応しなければならず、身体所見や食事の摂取状況、普段との違いなどを観察することで患者の状態を把握する。まさに総合診療であった。

今回の研修を通して学んだことはたくさんあるが、一番強く感じたのは、医療は生活の中心ではなくその患者の生活によりそう形であるべきではないかということだ。診療所があふれ誰でも簡単に大きな病院で精密検査を受けられる都市部では、医者もそして患者側も医療が中心の考え方になりがちなのではないか。それは完全に悪いことではないが、本来あるべき形ではないのではないかと感じた。

今回、このような貴重な経験をさせてくださった嶺北中央病院の先生方をはじめ職員の方々、地域の皆様に心より感謝すると共に、この経験を今後の医者としての人生に活かしたいと思う。